

世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



「人間すごろく」で楽しく異文化理解

「よいしょ!」「3だ!」
男の子が自分の顔ほどの大きなサイコロを床に転がす。出た目を見て声を上げるのは息子を見守るお父さんとネパール人研修員。民族衣装を着た元青年海外協力隊の御厨洋子さんに促されて、親子一緒



「人間すごろく」のひとつま。親子と途上国の研修員と一緒に、クイズの答えを考え、異文化への理解を深めた

に大股で3歩進むと、白色の枠にたどり着いた。
「白色だね!じゃあ、この問題に答えられるかな?」

ここは、福岡県八幡市にあるJICA九州の一室。10月14日、親子で異文化理解を楽しむイベント「地球生活体験学習」が行われ、北九州市内の小学生とその保護者ら約120人が集まった。

プログラムの中でも特に人気があった「人間すごろく」は、その名の通り、人間がすごろくの升目を進みながら、異文化を体験するゲーム。床にかたどられた白・赤・黄色のいくつもの升目を、出た目の数だけ進み、止まった升目の色によって異なるアクティビティが用意されている。白色の場合、開発途上国の文化に関する三択クイズに、



赤色なら言語に関するクイズに挑戦し、黄色なら外国の食べ物・飲み物を試す。冒頭の男の子は白色に当たったため、文化に関する三択クイズが出された。

「タンザニアのお札の透かしに描かれている動物は? キリン ソウライオン」

これまで考えたこともないような問題の答えを一発で当てるのは難しいが、御厨さんらにヒントをもらいながら、正解の「キリン」を当てることができた。

子どもたちは、研修員(右)や友人、元隊員と話しながら、「エコバッグ」に絵を描き、地球環境を自分たちの手で守っていくことの大切さを学んだ

第8回 親子で地球を感じよう!

地球生活体験学習 in 福岡

10月6日の「国際協力の日」にちなんで、1992年から毎年、JICA九州で開催されている「地球生活体験学習」。今年は10月14日、福岡県北九州市内の小学生とその保護者ら約120人が集まり、元青年海外協力隊や教員、開発途上国の研修員とともに異文化を体験した。

御厨さんから元隊員がアイデアを出し合って考えた質問は、小学生でも興味を持って考えられる内容ばかり。国際協力出前講座¹などで講師を務めた経験を持ち、途上国の文化や習慣を分かりやすく解説してくれる元隊員の話聞きつつ、親子は楽しみながら異国の地に思いをはせた。

ラクダに乗った少年の写真から

一方、「シリアの部屋」と書かれた隣の部屋では、中東地域独特の音楽が鳴り響く中、



教師海外研修で初めてシリアへ行った枝村さん(左)。「異なる環境で暮らす人々のことを伝え、子どもたちの視野が広がってほしい」と開発教育に積極的に取り組んでいる

頭にターバンを巻いた男性が参加者に語り掛けている。今年8月、JICAの教師海外研修²でシリアを訪れた福岡高等聾学校の英語教員、枝村健一さんだ。ラクダに乗って砂漠を進む少年の写真を見せながら、少年がラクダを使って水などを運ぶ仕事をしていることを説明した後、「彼の一番大切なものは何か分かる?」と質問。参加者たちがしばし考え込む中、一人の女の子が元気に「ラクダ!」と答えた。枝村さんは、「その通り!」と笑顔で返し、砂漠で生きる人々にとってモノや人を運んでくれるラク

いが書かれた「大切なもの」は、一枚の大きな紙に張られ、親子は枝村さんから聞いたシリアの人々の「大切なもの」と比較していた。

地域に国際協力の輪を広げよう

そのほか、参加者は地球環境への意識を高める第一歩として「エコバッグ」を作ったり、世界各地の民族衣装を試着するなど、研修員らと交流しながら途上国の文化に触れた。また、午後からはウガンダ出身のティモシー・C・S・キピラさんによる太鼓の演奏などが行われ、大人も子どもも全身を使って異国の音楽を感じていた。

今回初めて参加した遠藤順子さんは、「日本の将来を担う子どもたちにグローバルな視点や身に付けてほしい。幼いころからこういつた世界を感じられるイベントにどんどん参加させたい」と満足げだ。孫の優香ちゃんも功成くんも「楽しかった!」と元氣よく答えた。また、マレーシア人研修員のアズーラ・アブラマンさんも「日本の親子と触れ合う貴重な経験ができた」と喜んでいる。今年で15回目を迎える「地



ウガンダ出身のキピラさんが歌と太鼓、ダンスを披露。大人も子どもも歌って踊り、アフリカの軽快な音楽を楽しんだ

球生活体験学習」。JICA九州の仲宗根邦宏さんは、「今年はリピーターも多数参加し盛り上がった。地元の親子や先生たちの中から国際協力に関心を持つ人が一人でも増えてくれたら」と話す。企画・運営には、福岡県だけでなく九州各地の元隊員34人が協力。「テレビや本の中だけでは知ることができない世界のさまざまな文化や暮らしを伝えたい。これからも九州各地で国際協力のイベントを開催していきたい」と意気込んでいる。

1 JICAの開発教育支援事業の一つで、開発途上国の実情や国際協力の必要性を理解してもらうため、JICA職員や専門家、ボランティア経験者、来日中の外国人研修員などを講師として学校などに派遣する制度。講師の派遣に関する問い合わせは、最寄りのJICA国内機関(<http://www.jica.go.jp/worldmap> 参照)へ。

2 国際理解教育・開発教育に関心のある教育機関の教員などを対象に、約10日間、途上国の社会・教育事情や日本の国際協力活動を視察するプログラム。問い合わせは最寄りのJICA国内機関へ。